

新島襄を看取った「熊本バンド」

不破唯次郎

本井 康博

(同志社社史資料室)

●「熊本バンド」

「熊本バンド」は草創期の同志社を流星のごとく駆け抜けた。その光芒は今も鮮烈で、まさに「七光り」である。

たとえば新刊の『岩波キリスト教辞典』(二〇〇二年六月)。原稿執筆を依頼された時点で、同志社関係項目を数え上げてみたら、二十三あった。そのうち「熊本バンド」関連項目はなんと十一を占める。ただし不破唯次郎は立項されていない。さらに同志社が編集中の『同志社山脈』

(晃洋書房二〇〇二年十一月刊行予定)。百十三人の同志社関係者の列伝中、第一回卒業生(十五人全員が「熊本バンド」!)が実に十一人も登場する。ただし不破の項目はここにもない。

熊本洋学校の廃校後、同志社英学校に「頭脳流出」した俊才たちは総数約四十人に上る。そのうち第一回卒業生十五人を「熊本バンド」本流とすると、その中では不破の陰は薄い。

不破は熊本洋学校のL・L・ジェーンズから洗礼を受けた。他の入信者同様に家族や住民から「迫害」を受けた(不破

唯次郎「チェーンズ先生を追憶して」、

『九州文学』三一、一八九三年一月)。卒業直後の一八七六年秋に吉田作弥、亀山昇と連れ立って創立まもない同志社に転じた。一八七八年には弟の伊三郎、静象も同志社に学ぶ(『同志社百年史』資料編一、三四～三五頁)。

「熊本バンド」の俊才連は授業でJ・D・デイヴィスや新島襄をやりこめた。不破によれば、「私共のクラスは変人の集りで随分乱暴もした」ので、デイヴィスは「それはそれは随分八ヶ間敷お叱になりました」が、D・W・ラーネッドは



不破唯次郎(新島襄へ贈呈されたもの。1882年5月20日、福岡で撮影)

一切叱らなかつた(不破唯次郎談「終始一誠意のラルネッド先生」、『同志社時報』一五九、一九一八年十二月一日)。

在学中、彼らは学業のかたわら「助教」として下級生を教えた。不破は「非常に喧嘩好きの先生」で、英語の授業中に生徒と激論して殴り合うことが一学期に二、三回はあったという(『創設期の同志社』一〇八頁)。一方で伝道にも励んだ。不破も一八七八年に岡山県笠岡で夏季伝道に従事した。新島は地元の信徒宛てに紹介状を持たせて彼を送り出した(『共愛学園百年史』上、七三二頁、同学園、一九九八年。ちなみに同書は『新島襄全集』に収録漏れ)。

●博多で開拓伝道

卒業演説「伝道師は学術あるを要す」で同志社を出た不破は一八七九年末から福岡伝道に着手。同地の定住伝道としては組合教会初、いやプロテスタント初のケースである。翌年、九州伝道に赴いた新島は、博多に着くとさっそく不破家を訪ね、同地で説教を行った。名所の「芥屋の大門」(糸島半島にある海食洞)へも一緒に遊行した。そればかりか熊本からの帰途にも再度同家に立ち寄った(『新島襄全集』五、九五～九九頁)。

不破の働きは一八八五年に福岡基督教会(今の福岡警固教会)の設立として結実する。「自給独立」を宣言して組合教会系の全国的な伝道機関、日本基督教伝道会社の補助金を辞退した。当然犠牲も伴った。旧友の「熊本バンド」、海老名弾正は、不破は比較的裕福だったが、福岡伝道で財産の大半を失った、と証言する(『荒川文六編「恩寵七十年の歩み」』五頁、日本基督教団福岡警固教会、一九五五年)。不破は村山清(神戸女学院第一回卒業生)と結婚し、二児を与えられた。

新島は不破夫妻の福岡伝道を陰で支えた。新島の日記には「不破之三十円(十一月、十二月分)遺ス」(圏点は原文)とある(『新島襄全集』五、一八八頁)。二度目の渡米中も不破のために募金を怠らず、二十五ドル(同前三、四四二頁)、ついで二十九ドルを送金してきた(『恩寵七十年の歩み』二〇～二二頁。ちなみに同書中の新島書簡も『新島襄全集』に収録漏れ)。

●前橋での活動

ついで、海老名の跡を継いで前橋教会牧師に就任。キリスト教主義女学校の設立にも取り組み、新島にも発起人を要請



最初の妻、不破清。神戸英和女学校で西山小寿(金森通倫夫人)と同級



2度目の妻、不破雄（京都看病婦学校第2回卒業生）

した。日の目を見た前橋女学校（今の共愛学園）で不破は初代校長を務めた。「熊本バンド」の旧友、加藤勇次郎が初代校長を務めた前橋英学校（共学）の第三代校長にも就任した（『共愛学園百年史』上、一三七頁、同学園、一九九八年）。同校はキリスト教主義ではなかったが、不破清を始め三人の女性信徒が英語教師を務めた。彼女たちが、キリスト教主義女学校を望んだのが、前橋女学校の起点となった（同前、上一五〇頁）。

一八八八年五月二日、不破夫妻は東京に出た折り新島を宿舎に訪ね、昼食を共にした（『新島襄全集』五、三〇四頁）。夏には逆に新島が伊香保保護の行き帰りに前橋に短期滞在した。「不破氏ノ夫婦

ニハ度々尋呉レ、又種々ノ食物等ヲ送り呉レリ」とか、「不破ノ家ニ趣キ半日ヨヲ送ル」と新島は日誌に記す（同前五、三五五頁、三七四頁）。清は翌年、天逝した。子どもを抱えて難渋した不破は新島の斡旋で北里雄と再婚した（同前九下、九六七頁）。京都での結婚式は新島が司式をした。

不破の前橋時代は公私ともに多事で、彼の力量が最大限に発揮された時である。在任四力年間で受洗者を二百人以上生んだ『共愛学園百年史』上、一六九頁。新島との親密な交流もこの期の特徴である。新島からの書簡は都合、七通が知られている。他方、新島宛て不破書簡は三十七通にも及ぶ。これらの四十四通は福岡で不破が受信した二通を除いてすべて前橋時代の往復書簡である。

こうした書簡の頻繁なやり取りは徳富蘇峰を別格とすれば、「熊本バンド」では異例のことである。年次的に見ると、新島宛て書簡は新島が死去する一年前に集中する。なかでも一八八九年七月だけで、不破書簡は七通にも上る。さらに新島死去の一月とその前月に限定すれば、

二カ月間で七通（不破雄のものを加えると八通）である。新島は不破夫妻との交信中に死去したのである。

●教会合同運動

彼らの往復書簡の焦点は、進行中の教会合同運動であった。「熊本バンド」主流たる小崎弘道や横井時雄、金森通倫、宮川経輝、海老名弾正といった組合教会（会衆派）系の有力牧師は、一致教会系（長老派）の植村正久らと連携して、両教会（両派）の合同に邁進した。これに對して新島はあくまでも慎重、いや批判的であった。合併の結果、組合教会の善き伝統である「自治教会」方式（会衆主導の民主政治）という教会運営が、「長老教会」方式（牧師・長老主導の寡頭政治）に取って代わられるに相違ない、と予測、あるいは懸念したからである。

この点、推進派の「熊本バンド」主流は樂觀的であった。組合教会内部で新島を凌駕するほどの力量を持ち始めた彼らは、恩師と対立する立場に立たされた。これに對して、同じ組合教会でも、彼ら

の後輩に当たる若手の伝道師や同志社学生たちは新島を支持した。その点、不破の立場は特異である。本来、年齢、人脈の上で推進派に属して当然の彼が、反対派に与したからである。不破は旧友の横井を「中止説ノ大統領」にしたい、とさえ望む（『新島襄全集』九下、九七六頁）。

この不破は前橋教会牧師として群馬県下の組合教会系諸教会を束ねる立場にあった。彼は杉田潮（安中教会牧師）、杉山重義（原市教会牧師）とトリオで共同歩調を取ろうとした。不破の願いは、「せめて上州だけでも一致した行動を」であった（同前四、七九八頁）。

ところで新島が反対派拠点として期待したのは、①自分がかつて初代牧師を務めた同志社教会、②上州組合教会系の七教会、③東京の組合教会（靈南坂教会、番町教会）の三箇所である。このうち同志社（金森、前橋（不破）、靈南坂（小崎）、番町（同前）の牧師はいずれも「熊本バンド」であった。ただ、不破は金森や小崎とは一線を画した。

新島はこれら三拠点を結び合わせて合同派侵入を防ぐ防波堤を築く必要を感じ

た。「関東フェレーション」（上州・東京連合）、ついで関西との連合構想である。いわば「熊本バンド」主流派包囲網の形成である。この戦略上、不破は極めて重要な地点にいた。新島は東京に出た折り、不破、杉田、杉山、那須義質（富岡伝道所）の上州組を人見一太郎、竹越与三郎の東京組（靈南坂教会員）に引き合わせ、連合策を練らせた（同前八、四六五頁）。

●伝道の拡張

伝道に関する限り、新島は一貫して「膨張主義者」であった。組合教会の「自治」原則に立つ教会を日本全国に網の目のように広げたかった。西日本の次のターゲットは東日本であった。一八八九年夏に武州大宮（今の秩父市）に同志社から大久保真次郎を送りこんだ新島は、次いで関東や信州、福島（郡山）などの未開拓地に新人を補給したかった。それは一刻を争う緊急事であった。

なぜなら、一八九〇年春には一致教会系の東京一致神学校が十九人の卒業生を

出すからである。同志社神学校は、と言えば、卒業予定者はわずか二人。せめて「屈強ノ伝道者十人」が欲しかった（『新島襄全集』四、三四六頁）。新島は焦慮感に囚われた。二年後の「別科」（日本語神学科）卒業予定者名まで日誌に列挙して伝道策をあれこれ思案した（同前五、四〇五頁）。

彼は翌夏に卒業する「虎の子」の新人伝道師を二人とも、すなわち青木要吉（岡山県出身）と寺沢精一（群馬県出身）を共に上州に派遣する心積もりであった。それほどまでに新島は上州伝道に肩入れしていた。その際、受け皿、あるいは司令塔と目されたのが不破である。さらに新島は不破に對して、新島家の養子である新島公義を信州伝道に当たらせる計画を進言している。公義は当時、奈良で伝道中であったが、日本基督伝道会社の幹部、すなわち「熊本バンド」主流と衝突し、転出を希望していた。

新島が見るところ、公義と「熊本バンド」主流はソリが合わない。後者が牛耳る伝道会社からの派遣ではなく、上州の諸教会が公義を信州に招く、という方策

がとれないか、と新島は不破に持ちかける。教会合同運動の後遺症か、自分たち親子は何かにつけ「熊本バンド」から疎外されている、と新島は憶測する。それだけに「伝道会社委員大先生」への不満を私的に、しかも度々新島に漏らす不破とは連帯できた（同前九下、九四九頁、九六一頁、一〇三三頁）。

●新島の最期を看取る

まもなく不破夫妻は新島の終焉に出くわす。大学設立募金のために病を押して関東に打って出た新島は、前橋で力尽きて倒れた。上州人・新島の公的生涯は奇しくも上州で終ったのである。

さっそく夫妻は恩師の看護に尽力した。とりわけ夫人（雄）は、新島が創立した京都看病婦学校の卒業生だけに病人の世話に手慣れたものだった。「不破ノ妻君ノ尤周到ナル看護ニヨリ、実ニ摂生法ニ於テハ申分ナキ」と新島も激賞する（『新島襄全集』五、四八〇頁）。彼女は新島の発病翌日から約半月間、朝から夜の十時、十一時まで看護し続けた（『追

悼集』六、三四八頁）。

全快しないまま新島は湯たんぽを抱えて前橋からいったん東京に引き揚げた。ついで温暖地での転地療法を蘇峰から勧められ、大磯の旅館、百足屋に移った。不破は相変わらず前橋から新島の指示を書簡で仰ぎ続けた。夫妻は東京での横井小楠夫人の葬儀（一八九〇年一月五日）の帰途、新島を見舞い、百足屋に一泊した。小康を得ていた新島は前橋での看病のお礼に、と夫妻に手料理を振る舞い、翌日は市内を案内さえしている（同前六、三五一頁）。

最後の不破書簡は一八九〇年一月十七日に、しかも二通認められた。公義の赴任準備を伝える信州視察報告である。同日、大磯でも新島は書簡を卒業生などに何通か認めたが、それらが最後の書簡となった。十九日には返書の代わりに危篤電報が不破家に届いた。夫妻は慌てて大磯に駆けつけた。腹膜炎で断腸の思いをしていた新島であったが、雄の顔を見たり、「かしわのスープを」と所望し、一口だけ飲んだ。彼女は看護婦として新島の最期を看取った（同前六、三五二頁）。

二十三日に新島は帰らぬ人となった。不破は新島の遺体に付き添って京都まで同行した。

新島の死後、奈良の公義は信州（長野市）へ、新卒の青木は仙台の東華学校（同志社分校）へ、そして寺沢は前橋教会へそれぞれ赴任した。教会合同運動は新島死去が火消し役となったかのように頓挫した。一方、一致教会は、組合教会のいわば「縄張り」である京都に新卒伝道師（村岡菊次郎）を送り込んできた。新島が生きていたら一致教会の「逆襲」と受け止めたかもしれない。村岡はすぐさま今の室町教会を市中に立ち上げた。逆に不破は翌一八九一年、前橋を引き揚げて京都に戻り、平安教会の牧師に就任した。しかし、失明に見舞われ、七年後には引退。余生を京都教会員として送った。したがって京都では不破雄の活動の方がむしろ目立つ。母校（京都看病婦学校）の教員・同窓会長や同志社女学校の教師、それに京大病院ができると初代の看護婦長にも就任したからである。

京都は不破夫妻には終焉、永眠の地となった。二人は今も新島の墓に向き合っ

て眠る。



同志社英学校第1回卒業生（1879年6月卒業）。いわゆる「熊本バンド」の中核である。前列左から市原盛宏、宮川経輝、加藤勇次郎、吉田作弥。後列左から岡田松生、森田久萬人、不破唯次郎、小崎弘道、伊勢（横井）時雄、金森通倫、海老名弾正、山崎為徳。以上の12人以外にも下村孝太郎、和田正脩、浮田和民がいるが、写真には写っていない。

《略歴》ふわ・ただじろう（1857.1.28～1919.8.13）

牧師、教育者。肥後国本山町に生まれる。熊本洋学校（第2回卒業生）、同志社英学校（第1回卒業生）を経て、福岡、前橋、京都で伝道に励む。前橋では前橋英学校校長、前橋女学校校長をも兼務した。最初の夫人（清）は神戸英和女学校、2人目の夫人（雄）は京都看病婦学校の卒業生。

京都で死去し、若王子に埋葬。同志社の同期生では山崎、森田に続く埋葬で、以後、蘇峰を例外として「熊本バンド」の埋葬はない。